

川田工業(株) ○正員 村瀬 充
 (株)橋梁メンテナンス 正員 磯 光夫
 川田工業(株) 正員 越後 滋

1. 背景と目的

元来、人と都市との関わり合いは、住まう・集う・行動するといった生活としての、「場」と「歴史」によって構築されてきた。また、人と人とのコミュニケートは、公共空間と呼ばれる街路・広場・通り・中庭・公園などにおいて行われてきた。

しかし、近年の都市は、経済成長に伴って増加した都市流入者への団地建設などの推進により、用途地域制・不燃化・クルマ社会などに対応することで、機能性・経済性・効率性の達成ができたものの、固有性・歴史性・地域性の損出が生じ、人と人とのコミュニケートが薄化した。そこで、これから到来する長寿社会において、老人のための施設の必要性が高まり需要も増すことから、社会的弱者や優しさの持つコミュニケートの「場」が必要となってくる。本文は、薄化したコミュニケートを再構築するための「場」を橋梁に着目し多機能を付加することで、新たなコミュニティのあり方について提案することを目的としている。

2. 「場」の現状

街路や公園などの公共空間において生活するための施設は、空間的・風景美として町のシンボルであった。その中でも橋梁は、図-1に示すように庶民描写絵の「浮世絵」や「浮世絵草子」にも描かれていたり、「橋詰め」や「橋銭」と呼ばれる言葉に表現されているように、人と人の出会いやコミュニケートの「場」であった。また、本来の役割である町と町とを結ぶ重要な軸であり、都市の風景を鑑賞する空間でもあった。

しかし、近年ではクルマ社会による交通インフラの発展や生活圏の拡張のために、「橋を架ける」という概念が強くなり本来あるべき町は、通過点としての町へ移行するとともに周辺地域とのつながりが薄化し、元来持っていた橋梁と人との関わりがなくなりつつあるのが現状である。

3. 橋における「場」の再構築に関する方策

(1)均質都市（大都市と同じ性格を構築した地方都市）からの転換

現在の均質都市は、独自性を失い、大都市圏並の交通整備により人口が流出し、都市が衰退しつつある。そのため、各均質都市では、町おこし事業を行い均質都市からの転換を必要としている。ここで富山県を例にとってみると、成人の人口は、主に隣県や中京・関西地区に流出し著しく減少している。そこで、各市町村では、独自の文化や環境の見直しを行い、他地域にはない特性を強調し独自性を競い合い、その地域にふさわしい場所を選んで象徴施設を構築することで、魅力ある町づくりに取り組んでいる。また、図-2に示すように橋梁を象徴施設として構築した地域もみられる。

(2)新規導入機能

橋梁は、風景を鑑賞する空間・風景美・シンボル性

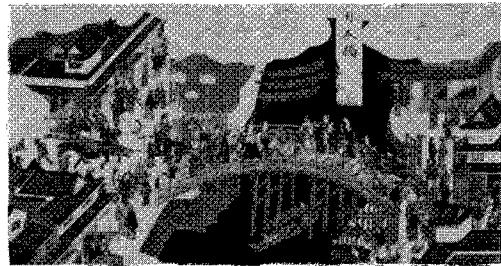


図-1 日本橋周辺のコミュニティの「場」¹⁾



図-2 象徴施設として構築された東橋

・交通インフラなどといった、多くの要因を持った社会基盤である。橋梁が都市と周辺河川との間に介在することで、現在の都市が最も欠けている自然環境や文化水準などの都市性の向上につながる可能性がある。

(3)周辺整備

橋梁が都市と河川の間介在することで、新しいコミュニケートの拠点をつくることである。さらに、単機能の充足だけでなく、周辺地域の住居・街路・公園・広場・集会所などの機能と連結することにより、町に魅力を与え補強していく。

4. 橋梁における「場」の再構築に関する構想

(1)内容

図-3に示すように橋梁に着目して、橋梁と河川敷にコミュニケートの拠点をつくり、集会場・公園・交通機能施設などの諸機能が集結した地域開発を行う。

(2)周辺計画

一般的な河川敷や橋梁周辺地域は、緑地・公園・広場が少なく、人と人との出会いやコミュニケートの場所的要素も少ない。そこで、ここでの周辺計画は、積極的にコミュニケートの場所を誘導し住民や旅人などの広域的なコミュニケートの軸を形成する。また、広幅員の橋梁を構築し、陸路、水路、空路の交通整備を行い、交通動線が結節されるよう計画する。

(3)コミュニティ計画

コミュニティの場所が人にとって、身近にあり、気軽に利用できるものとする。また、河川や河川敷などのアメニティ空間と人々の関わりにより、文化・教育・健康などの多大なニーズに対応し、多種多様な情報を提供することで時代に対応した魅力ある「場」をつくり、近未来における礎とする。



図-3 橋梁における「場」の再構築計画

5. 今後の方策

今回の構想は、広狭なソフト的提案であり、場所の設定をしなかったため、ハード的な面において漠然とした点が多かった。今後は、時代背景や生活スタイルを把握するとともに場所を設定し、その場所に適した第二・第三の提案をハード的な面で行っていく必要がある。また、コミュニティと場所との関係について、実際に人の流れを調査分析し、構想どおりのコミュニティが得られるのかを検討していく必要がある。

参考文献

- 1) 国立歴史民俗博物館：講談社，pp. 76～pp. 82.
- 2) 新建築：新建築社，pp. 263～pp. 284, 1993年11月.
- 3) 新建築：新建築社，pp. 269, 1994年12月.